

阿波踊り連による移住者の生活変化と地域との関係構築—徳島県神山町を事例に

○小田史郎（慶應義塾大学大学院）・坂倉杏介（東京都市大学）

Keyword：神山町、移住、桜花連

【問題・目的・背景】

地方の人口減少が進む中で、都心部での若者の農村漁村への定住願望は増加している（内閣府，2005；内閣府，2014）。他方で、Iターンをはじめとする移住者の移住後の定着率の低さが問題とされており、その要因の一つは地縁がないことによる地域との関係構築の難しさだと言われている（日本農業新聞，2014）。

また、先行研究において移住者と地域住民の関係構築には、お互いの価値観などのズレを理解し、歩み寄るための相互理解の機会が必要だと論じられている（高木，1999；皆川，2009ほか）。

他方で、本研究が対象とする徳島県神山町は、移住の成功事例とされているが、その成功要因についての研究はグリーンバレーの活動による信頼に基づくつながりに着目した研究（潜道，2018）や移住者希望の選抜によるマッチングの分析（米山，2018）などにとどまっておらず十分とは言えない。

本研究では、移住者と地域住民の関係構築を促す仕組みとして神山町の阿波踊り連である桜花連を対象に、桜花連が移住者と地域住民の関係構築に与える影響とその要因を明らかにすることを目的とする。

【対象地概要】

徳島県西郡神山町（以下神山町）は、面積約730km²のまちで人口5000人程である。徳島市から車で1時間ほどの山間に位置しており、吉野川の支流である鮎喰川が流れている。

神山町は、IT環境を活かした企業誘致や空き家とのマッチングによって移住者数が増え、先駆的地域活性化の事例として取り上げられることの多い地域である。グリーンバレーは、アメリカから日本に友好親善の証として送られた「青い目の人形」を里帰りさせようと「アリス里帰り推進委員会」を結成したことが始まりで、現在ではアーティスト・イン・レジデンスやオフィス・イン・レジデンスなど多様な取り組みを行っている。

【対象集団概要】

桜花連は、阿波踊り連がなくなった神山町で1992年に青年団活動の一環として結成された阿波踊り連である。結成時は30名ほどだった連員は、2018年には69名となり、そ

のうち約3割は移住者である。

連の特徴として、1) お年寄りなど徳島市内の阿波踊りに行けない人のために神山町内で踊ることを中心に据えていること、2) また神山町に演舞場がないことや町の住民に高齢者が多いため、町内の約20箇所にバスで出向き、踊りを披露すること、3) 伝統文化である阿波踊りを通じて神山町を知るきっかけとなっていることなどが挙げられる。



図1 桜花連の踊りの様子

【研究方法・研究内容】

桜花連の特性とそこでの移住者の体験を明らかにするために、小田(2018)の質問紙による調査結果を踏まえた上で以下の調査を行った。

- (1) 連の歴史、連員の変化、連の運営についての連の役員（連長、事務局）に対しヒアリング
- (2) 通常の練習(2018年6月13日、8月10日)と阿波踊り期間(2018年8月12、13、15日)の参与観察
- (3) 桜花連の移住者の連員(3名)に対して、インタビュー（交流の実感、連の印象、生活の変化など）

表1 インタビュー対象者のプロフィール

	パート	神山居住歴	桜花連歴
Aさん	男踊り	6年	6年
Bさん	鳴り物	1年	3ヶ月
Cさん	女踊り	4ヶ月	4ヶ月

【研究・調査・分析結果】

1. 参与観察調査

参与観察の結果、連内で起きている連員同士の関わりや、阿波踊り期間中の連（もしくは連員）とまちの住民との交流を捉えることができた。

通常の練習の際には、連員の中の無意識な役割分担が

見られた。具体的には、連長は鳴り物を担当しつつ大まかな指示を出すことが多い一方で、他の連員は細かく指導することに注力していた。ヒアリングでこのことについて伺うと、大まかにパートリーダーのような存在は決められているが、練習の中での各連員の立ち回りはそれぞれに一任されており、各々が自身の役割を理解しつつ、自分のできる形で連に貢献していることが分かった。

さらに、踊れる連員と新入りで踊れない連員の練習を完璧に分けないことで、踊れる連員に対する憧れや自身も踊れる様になりたいという思いを高めていることも明らかになった。実際の練習ではフォーメーションの確認の際に、踊っている連員の後ろで新入連員が真似して踊っている姿が見受けられた(図2)。

当日が近づくと、新入連員をはじめとして多くの連員が少しでも仕上げたいという意識から顔つきが真剣になることが多くなっていった。一方で、練習の際には軽口が飛ぶなど真剣になりすぎることによって肩に力が入る新入連員のフォローを先輩連員が行っている姿も見られた。



図2 通常の練習の様子

当日は、病院前で踊った際に、近隣の住民だけではなく通院している患者やお医者さんも含めた全員が手を止めて桜花連の踊りを見ていた。その際には、見ている側も手拍子を叩き、「ヤットサー！」と声を上げるなど、観客という立場ではなく、阿波踊りを構成する一人として踊りを作り上げていた。また、踊り手も見ている人も笑顔が絶えず、阿波踊りという存在が全体の楽しみになっていることが確認できた。

踊っている場所によっては道路にせり出している部分も多く、連員やバスの運転手など持ち回りで交通誘導を行いつつ踊っている場面も見られた。

さらに、対岸にいる地域住民により近くで阿波踊りを見せるために車通りを気にしながら極力せり出しており、「住民に阿波踊りを届ける」という側面が強く現れていた。

地域住民の視点としては、差し入れを持ってくる住人も多くおり、飲み物やご飯などの振る舞いで桜花連を迎え入れていた。



図3 踊り終了後に住民と連員が会話をしている様子

また、踊りに同行していく中で、職場の知り合いや普段関わる方たちへの感謝を踊りで伝えると言った側面もあることが分かった。踊る場所に縁がある連員が中心に踊る事が多く、お世話になっている場や人に踊りを届けることが感謝の気持ちを伝えることにもつながっていた。

最終日の最後の地点では、演舞終了後に住民も入り混じった輪踊りが行われるなど、伝えるだけではなく共有して全員が楽しむといった行為が見受けられた。



図4 住民と連員と一緒に輪踊りをしている様子

2. インタビュー調査

インタビュー結果は、コードマトリクスを用いて分析を行った。会話の内容から実態を客観的に示すために、インタビュー内容のトランスクリプトを作成し、その中からキーワードとなる項目を軸に、対象者3名の発言をまとめた。

項目は、小田(2018)が桜花連において1) 新規参加者を受け入れ、助け合う姿勢 2) 活動自体の魅力 3) 移住者・地域住民の両者の3要素が団体内で移住者と地域住民の交流を促進しているということ踏まえた上で、インタビューデータの内容から「知り合いに誘われる」「練習内

で交流する」「飲み会や町内のイベントで交流する」「まちに顔見知りが増える」「桜花連ならではの」「連員同士の助け合い」「神山町のことを知る」「連員として町で暮らす」の8項目とした。

1) 知り合いに誘われる

この項目では、「元々阿波踊りをやっていたということもあり、連員の〇〇さんに会ったときに入連した」「桜花連に知り合いが入っていて、元々桜花連のことは知っていた」といったように、知り合いの連員を介して桜花連を知り、入連するといった参加プロセスであることが明らかになった。

これらについて考えると、桜花連の連員がもつネットワークが入連に大きく関係しており、桜花連に誘うための勧誘活動というよりは、桜花連につながるための窓口として常に開かれていると言える。

2) 練習内で交流する

練習に参加していく上で、指導を通じてコミュニケーションの接点を得ることがあり、そこをきっかけにして関係が形成されていることがわかった。

また、Bさんの「練習は、自分にとってふけるようになるために練習する場所というイメージだったけど、通しなどで一人で吹いているときに元の笛のメンバーが来てくれると安心感があつた」という発言から一般的な人間関係における信頼に加えて、阿波踊りの技量から生じる信頼関係があることが推察される。

3) 飲み会や町内のイベントで交流する

練習外にも打ち上げなどとして開催される飲み会では、パートを超えた交流も多く普段話せない連員と会話をするきっかけとなっていた。

さらに、移住者の連員が神山町で行うイベントについても、連員同士で一緒に参加したりすることもあることから、連内でのつながりは神山町全体を盛り上げることにも関係しているのではないかと考えられる。

4) まちに顔見知りが増える

この項目からは、桜花連で知り合いが増えることは神山町でも同時に知り合いが増えることだとわかる。桜花連の中だけで閉じず、神山町内で会った際に話したりする関係になっており、そういったきっかけを通じてまちにいる住民の認識が変わっていた。

具体的には、Cさんの「役場に行って手続きをするときも、連員の姿が見えると安心する」という発言のように、まちに住む住民に対する認識が変わることで生活にも変容が起きていることが分かった。

5) 桜花連ならではの

他の神山町の住民の特性と桜花連を比べた際に見える違いについてまとめていくと、「桜花連のゆるさ」や「移住者慣れ」といった要素が抽出される。

「桜花連のゆるさ」は、こうしてみたら面白そうというひらめきや思いつきを躊躇せず試してみることができるといった環境を指しており、個人の阿波踊り以外の技能を活かすこともできる。

また、「移住者慣れ」については、移住者を受け入れるというよりも、適度な距離感を保つといった意味合いに近い。他の地方にもよく見られるケースとして定住に対しての地域住民からのプレッシャーが挙げられる。神山町の一部の住民にも見られるが、桜花連は移住者が転居するケースも見ているため、定住の強要はせずに阿波踊りを通じて程よい距離感で接している。

6) 連員同士の助け合い

桜花連に所属している連員は、普段は違う職業で生活をしていたり、作物を育てていたり和阿波踊りだけではない生活を送っている。Aさんの「クリーニングの相談したり、柿をもらったりする」という発言に分かる通り普段の生活の中で、連員と接する際に連という関係を超えた助け合いが生まれていることも明らかになった。

さらに、そういった助け合いの関係性から、家族のような温かい関係性が形成されていることがわかった。Cさんは「桜花連は、お父さんお母さん子どもで入ったり、小学校からずっと同級生の人たちが入っているような家族ぐるみみたいな関係で、その中に混ぜてもらえるっていうのは都会でもなかったから新鮮だった」と行っており、新規参加者が自身を桜花連の一員として感じることにつながっていることがわかった。

7) 神山町のことを知る

神山町のことを知るという項目の中には大きく、「神山町の情報を知る」「神山町独特の常識を知る」という2つの側面がある。

「神山町の情報を知る」という点では、桜花連内や連員同士の世間話を通じて神山町で起きていることや近隣のできごとなどを知ることができる。その中には連員が入退院したなどのパーソナルな情報を含み、そういった情報を得ることで連員の生活にも変化が見られる。

「神山町独特の常識を知る」という点では、もう少し深く神山町ならではの慣習や常識のようなものを知ることによって、その後の町での生活や連員同士の会話にも変化が生まれている。

具体的には、Cさんは神山町において同じ学年ということが大きな意味を持つことを知り、会話の読み取り方が変わったと述べていた。

8) 連員として町で暮らす

生活の向上としては、桜花連というアイデンティティによる住民とのコミュニケーションが円滑になることや、助け合いがより密になることなどが挙げられた。

このように、桜花連に所属していることによって、桜花連内や連員同士の関係性にとどまらず、移住者の生活環境に良い変化が見られていることが分かった。

【結論・今後の展開】

筆者は、移住政策の成功事例の一つとされている神山町に存在する阿波踊り連である桜花連を対象に、桜花連が移住者と地域住民の関係構築に与える影響とその要因について明らかにするため研究を行った。

その結果、入連については連員の持つネットワークによって興味や勧誘などで桜花連との接点を得た移住者が、「見学」という比較的心理的ハードルの低い行為を通じて阿波踊りに対してアクセスしていることが明らかになった。

交流に関しては、練習や飲み会などを通じて交流の機会を得て、その後阿波踊りの技能やその他の個人がもつ資源を通じた助け合いにより関係性が構築されていった。その中には、一般的な信頼とは別に、阿波踊りの技能面による信頼や尊敬が存在しており、そういった要素が交流に影響していることも考えられる。

加えて、桜花連に移住者が多いことで、連員自体も移住者に対する印象がステレオタイプではなくなっていることから、移住者にとって居心地の良い場所となっていることが明らかになった。

これらをまとめると、移住者と地域住民の双方が所属する桜花連は移住者と地域住民が知り合う場として機能しており、その上で双方にとって心地よい関係の構築を促進していたと言える(図5)。

また、桜花連という場で築かれた神山町内でのネットワークや神山町独特の文化に対する理解や町内の情報、また町民と共通の話題にもなりうる連員というアイデンティティが、移住者の神山町での生活をよりよいものに行っていることが明らかになった。さらにこのような利点があることが、桜花連への新規参入や所属の継続に関わっていることがわかった。

今後の課題としては、桜花連という単一のケースを掘り下げて行ったため、町内のその他の団体との関係など

については触れられていない。

そのため、今後は範囲を広げそれぞれの団体間の関係や団体固有の要素と移住者の参加や関係構築との関係性を見ることで、神山町において地域団体への参入によって地域住民と移住者との関係構築についてよりクリアになることが期待される。

また、多くのケースを見ていくことで団体の持つ要素を普遍化し、その他の地域にも当てはめるといった一般化可能性の度合いを高めていくことも課題とされる。

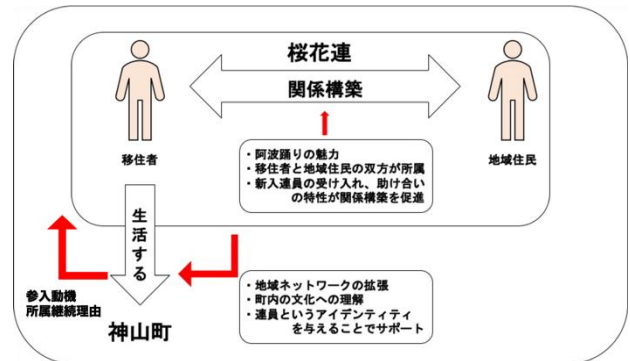


図5 桜花連と移住者の関係性

【引用・参考文献】

- ・高木学, 1999, 過疎活性化にみる「都市-農村」関係の諸相—I ターン移住者を巡る地域のダイナミズム, 京都社会学年報, 7, 121-140
- ・内閣府, 2005, 都市と農村漁村の共生・対流に関する世論調査
- ・中西宏彰, 2008, 田舎暮らしにおける新規定住者と農村側住民の共住に関する研究-京都府南丹市美山町 S 集落を事例として-, 農林業問題研究, Vol.44
- ・小森聡, 2008, 農村地域への定住に係る移住者の意向と受け入れ側の意識に関する研究-京都府南丹市美山町 S 集落を事例として(続報)-, 農林業問題研究, Vol. 44
- ・皆川萌子, 2009, 新規移住者受け入れ農村における住民の集落意識について, 同志社政策科学研究, Vol. 11
- ・内閣府, 2014, 農村漁村に関する世論調査
- ・関谷龍子, 大石尚子, 2014, 農村地域におけるソーシャル・イノベーターとしての I ターン者, 佛教大学社会学部論集, 59, 25-47
- ・日本農業新聞, 2014年10月12日
- ・米山秀隆, 2018, 移住者呼び込みの方策: 自治体による人材の選抜, 研究レポート, 451, 1-26
- ・潜道文子, 2018, ソーシャル・エンタープライズによるソーシャル・イノベーションの創出と「コミュニティキャピタル」, 拓殖大学経営研究, 111, 317-336